†Mind　Hunt†

†イリア†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†Ｍｉｎｄ　Ｈｕｎｔ†

【Ｎコード】
Ｎ２５３９Ｘ

【作者名】
†イリア†

【あらすじ】
舞台は日本。
近代化が着々と進む中、秘密裏に問題になっていることがあった。
それは、特殊な能力を持った人々によって起こされる事件の数々である。
そんな事件の被害者となった一人の少年の物語である。

第1章（前書き）

初めての作品なので
誤字脱字あると思いますが
少しでも多くの人が
この作品を
楽しんでいただければ
嬉しいです。

応援よろしくお願いします。

第1章

男「ハァ・・・ハァ・・・・」

男「うわっ！！」

男「俺は何もしてない。本当だ。金ならある。」
と、言いながら
アタッシュケースを開けた。

「・・・・」

男「やっやめろ！！そうか。金が足りないか。お前の望む金額にして・・・くっ来るなっ。頼む、見逃して・・・《グサッ》」

学校

「お～い！！アゲハ～。昨日のニュース見たか～？？」

周りなど気にせず、大声で叫びながらやって来る。

「……」

アゲハという男は叫びなど気にせずノートを書き続けている。

「おいおい。無視しなくてよくないか？？」

「…めんどい。」

あからさまに嫌そうな顔をして言う。

「そんなこと言うなや。親友だろ？？」

ニコッと笑いながら顔を近づける。

「わかったから、話聞くから顔を近づけんな！！燐［リン］。」

左手で燐の顔を押しのけながら言う。

「さっすがアゲハ。でさ、昨日のニュースだけ「ちょっと待て！！後ろの群れは何だ？？」

教室のドアのところに女子が群がってた。

「ハハハ。いつものことじゃん。」

へらへら笑いながらアゲハの肩に手を乗せてくる。

燐は学校でも1、2を争うイケメンだ。運動神経もトップクラスで女子たちの人気の的である。性格も明るく男子からも人気のあるいいヤツだ。その代わりかなりのバカだけど…。

「そうだな。いつもいつもお前は俺の勉強の邪魔ばっかしやがって！！あの群れ連れてどっかに行け！！」

そう言いながら燐の背中を押す。

「おっと。危ねぇじゃんか。つか、俺がどっか行っても半数は残るぞ。」

アゲハに向けて指をさしながら言う。

ドアに集まってる女子は燐目当てだけではない。成績優秀、運動神経抜群のアゲハ目当てでもある。

「全員お前の追っかけだろ。連れてけよ。俺はあの人たちと話したこともないしな。」

アゲハはかなりの鈍感である。人生であまり人とかかわらなかったせいでもあるが…。

「ハァ～。少しは気づいてやれよ。」
「燐。今何か言ったか??」
「何でもねぇ～よ。そろそろ時間だろ??帰るぞ!!」
隣の自分のクラスから持ってきていたカバンを担ぎながら呼ぶ。
「チクショ～。また勉強できなかったし。」
机に広げていたノートを片づけながらふてくされたように言う。
「勉強勉強言わなくても運動出来ればいいじゃん!!」
「お前みたいにバカにはなりたくないんだよ。」
「バカ言うな。…片づけ終わったか??じゃっ帰るぞ。」
「おう!!」
そう言って女子たちがいないドアから走って教室を出る。
アゲハたちが教室を出た時、時計は5時半をさしていた。
「で、さっき言ってたニュースってなんだ??」
あまり興味なさそうにしていたが、実際少し気になる。
「あっそうそう。なんか昨日の夜中、金融会社の社長が殺されたん

だって。」

この頃殺人事件が頻繁に起こっている。

「……」

アゲハは急に真剣な眼差しに変わった。どこか寂しいような、怒りを押し殺しているような表情にも見えた。

「あっゴメン。こういうのダメだったな。」

明るく振舞っていた燐もこう言うと静かになった。

「別に気にしないでくれ。昔の事だから。俺こそゴメン。…ほら、黙ってないで何か話せよ。」

「おっ…おう。そうだな。ハハハ。俺らしくねぇ～な。」

それから３０分くらい話してそれぞれの帰り道に分かれた。

家族

（どういう感じで入ったらいいのか…）

アゲハは、とある一軒の家の前でたたずんでいた。
表札には［榊原］と示されている。

春とはいえ、まだ外は肌寒い。家の前でいつまでも立っていることはできない。

「よし！！」

と、自分に喝を入れ、玄関のドアに手を掛け、力強く、ゆっくりと開く。
そして

「たっ…ただい「お帰り～！！」

「！！…」

大きな声と予想していなかったことが起きて言葉を失い、呆然と立ち尽くしてしまった。

「待ちくたびれたよ。家の前で１５分くらい立ってるんだから。一週間経つんだし、いい加減慣れたらどうなの？？仕方ないとは思うけど…」

この家に来てからまだ一週間しか経っていない。決して引越ししたというわけではない。幼い頃、ある事件で親を亡くしたため、この

榊原家の養子として引き取られたのだ。
普段の生活では［榊原］の姓を使っているが、学校とかではもともとの姓である［黒神］を使っている。

「ご飯出来てるよ。早く来なよ。」

少女は笑顔で手招きして呼んでいる。

「…ゴメン。愛花…さん。」

その言葉を聞くとニコッと笑って、キッチンに歩いて行った。

アゲハも後を続いてキッチンに入っていく。

「お帰り。」

キッチンに入ると家族全員笑顔で迎えてくれた。

「さっ。ご飯が冷めるわよ。」

と言って、母である皐月はせかしてくる。

「すみません。皐月さん。今日も自分の部屋で食べさせてもらいます。」

「そう…。わかったわ。」

と言う母の顔は一瞬悲しく見えた。

アゲハは食事をお盆の上に乗せ、自分の部屋がある二階に上ってい

く。

「ハァ…。まだ慣れないのかなぁ。」

母、皐月は悲しそうにつぶやいた。

自室に着いたアゲハは部屋の電気をつけ、食事を机の上に置いた。

「ごめんなさい。…いただきます。」

そう小さな声で言うと食事を食べ始めた。

数分後、空になった皿とお盆を抱え、キッチンに向かう。
するとそこには洗い物をしている皐月がいた。アゲハが部屋にいる間に食事を終えたのだろう。

「あっあの…。ごちそうさまでした。」

皿の乗ったお盆を差し出す。

「ありがとう。どう??口に合ったかしら??」

「はい。おいしかったです。…あと…今日も…・・・・・」

「いいのよ。気にしないで。慣れたら一緒に食べましょ。」

母の優しい言葉に

「はい。」

とだけ答え、キッチンを後にした。

そして部屋に戻ったアゲハは泣いた。母皐月の優しい言葉のせいでもあったが、それより再び家族を失うのが怖かった。幼い頃に家族を亡くしたアゲハにとって、家族の温かさはとても心地よいもの。しかし、それ自体、失う怖さを増すものでもあった。

しばらくして泣きやんだアゲハは風呂に入り、そしてベットに向かい眠りについた。

「お母さん。…お母さん、どこ??」

「ここにいるわよ。…お母さん、少し行ってくるからここで隠れてね。」

「なんで??」

「…かくれんぼよ。お父さんが鬼なの。お父さんかお母さんが来るまでずっと隠れてるのよ??」

「うん。わかった。」

それから何時間も待ち続けた。二時間、三時間・・・。
さすがに待ちくたびれてクローゼットから飛び出す。

「お母さん、お父さん、まだ??」

幼い足でリビングへと歩いて行く。

そこにはいつも真っ白な部屋の面影はなく、さまざまなものが散乱していた。

「なに??これ??」

少年は驚きと悲しみを抱きながら、一歩一歩歩みだす。
そして部屋の隅には真っ赤に染まったじゅうたんと、変わり果てた家族が転がっていた。

「・・・・・・・・」

少年は一点を見つめたまま、立ち尽くすしかなかった。

《バサッ》

アゲハは布団を跳ね飛ばしベットの上に座り込んだ。額には汗をか

いてるのがわかる。息遣いも荒い。

（またか…。）

最近同じ夢ばかり見る。ずいぶん前から同じ夢を見ていた。しかし、ここ最近毎日のように頻繁に見るようになった。

「うっ！！…」

そのあとに頭が割れるような頭痛が襲う。

アゲハは頭を抱えたままベットの上をのた打ち回る。

少しすると頭痛は治まった。

いつからだろう。悪夢や痛みと闘ってきたのは…。中学生の頃だろうか??両親の死をちゃんと受け入れられたのもこの頃だった気がする。

頭の痛みが完全にひいた頃には時計は3時過ぎを指していた。

アゲハは再び眠りについた。

学校

《ジリリリリリッ》

部屋中に目覚まし時計の音が鳴り響く。

「んっ…」

迷惑なほどに鳴り響く時計に手を伸ばし、ボタンを押す。

（…何時だよ??）

と思い、先ほどまで鳴り響いていた時計に目をやる。

（6時かよ・・・。もう少し寝よ。）

布団をかぶり直し再び眠りに着いた。

「・・・・・ちゃん…アゲハ兄ちゃん…」

名前を呼びながら頬をつつかれている感覚がする。

起きたばかりの重いまぶたを開き、声のする方を見る。そこには小学校低学年であろう少女が立っていた。

「…千鶴ちゃん??」

と、問いかけると少女はコクリと頷いた。

「…ご飯…出来てる。…降りて・・・・来て。」

それだけ言って部屋から出て行く。

アゲハは急いで身支度をし、一階へと向かった。

アゲハは、みんなが食事をしている部屋の前に立ち、ゆっくりとドアを開いた。

「おはようございます。」

と、部屋にいる人たちにあいさつをした。

すると笑顔で

「おはよう。」

と、ひとりひとり返してくれた。

そんな当たり前のことに嬉しさを感じながら自分の席に着く。

「いただきます。」

自分の前に用意された食事にありつく。

しかし、ひとつ気になることがある。

「あの…。薫さんと獅郎さんは??」

「お姉ちゃんとお父さんなら先に出たわよ。」

「そうですか。」

二人がいないことに納得し、再び箸を進める。

正直、家族と食事したりするのは気が進まない。しかし、こんな自分を家族として見てくれているのだから、朝ご飯には絶対に出ようと決めている。

「ごちそうさま!!…アゲハっ。先に玄関で待ってるから、早く来なよ。」

愛花は自分の食器を片づけながら言う。

「…はい。」

アゲハは残っているものを口に押し込め、急いで食器を片づけた。

「皐月さん。ごちそうさまでした。」

「待ってるわよ。早く行きなさい。」

と、笑顔で見送ってくれた。

アゲハは急いで自分の部屋に行き、カバンを取って愛花が待ってい

る玄関に向かった。

「すみません。遅くなりました。」

「いいよいいよ。てかさ、その敬語??やめにしない??家族なんだしさ。」

「はぁ…」

「同い年なんだし、気軽に話してくれればいいからさ。」

「…わかりました。」

相変わらず敬語でこたえるアゲハに、愛花は

（まだまだ時間がかかるなぁ。）

と、思うのであった。

「じゃ～行こっか。」

「はい。」

二人は学校に向けて歩き出した。

「……」

「……」

二人は一言も喋らないで学校に向けて歩き続ける。

「ねぇ…。学校は慣れた??」

痺れを切らした愛花はアゲハにたずねた。

「…まだ…慣れてません。」

「そう……。」

「……」

話を続けるために話しかけた愛花であったが、再び無言になってしまった。

そうしている間にも学校までの距離はどんどん縮まっていく。

「あぁ〜もうっ!!だから言ったじゃん!!気軽に話しかけてって。なんか硬いよ??」

「すみません。仲いい人とでないと緊張してしまって。」

アゲハはうつむきながら話す。

「緊張なんてしなくていいの。普通にしなって。普通に。」

そう言いながら、アゲハの背中を何回も叩く。

「…努力します。」

背中のことなんて気にしていないようである。

そのまま愛花が一方的に話しているまま、学校に着いた。

ここはアゲハ達が通っている東京都立天翼高等学校である。

「よっ！！お二人さん。」

二人で学校の玄関に向かっていると後ろから中田　燐が話しかけてきた。

「あっおはよう。中田君。」

愛花は少し驚いたような様子を見せたが、笑顔であいさつをする。

「なんだ。燐かよ。」

アゲハは燐のことを気にも留めないで歩き続ける。

「おはよう。榊原さん。…俺で悪かったな。」

愛花にあいさつを返した燐は、先に歩いて行くアゲハに向かって言った。

「ねぇ～。待ってよ。二人とも。」

愛花は先に靴を履き替えている二人のもとに向かった。

靴を履き換えた三人は二階にある自分たちの教室に向かって歩き出した。

「中田君とアゲハって仲いいよね??」

と、愛花は二人にたずねる。

「俺達、小学校から一緒の親友だからね。」

燐は自慢げに話す。

「…ただの悪友。」

「ちょっ…悪友って。そりゃないだろ。」

小さな声で言ったアゲハの一言も聞き逃さず絡んでくる。

「ホントに仲いいね。…じゃぁ～私のクラスここだから。またね。」

愛花は手を振りながら教室に入っていった。

「俺ここの隣だから。」

と言って、燐は愛花の隣の教室に消えて行った。

一人残されたアゲハは、燐のクラスと一つ離れた自分の教室に向かっていく。

そして教室のドアを開け、自分の席に着く。

ふと時計を見るとホームルームまで１５分もある。
特にすることのないアゲハは、一時間目の教科書を眺めて時間を潰すことにした。

しばらくするとホームルームが始まり、そして授業が始まった。
授業はいつも通り。休み時間もこれといって変わったことは、なかった。

そして昼休みがやってきた。

「よっ！！いつものでよかっただろ？？」

と言って、アゲハの机の上にパンをいくつか置いた。

「毎日ありがとな。」

財布からパンの代金を渡しながら言う。

「いいって。ついでだからさ。」

アゲハは昼食をパンで済ましている。
それを知っている燐はアゲハの教室に来るついでにパンを代わりに買ってきている。

「いつもパンばっかで、飽きないのか？？」

パンをぶら下げながらアゲハに言う。

「確かに飽きてきたけど…。」

「弁当、作ってくれるって言ってんだろ??」

「そうだけど、皐月さんに迷惑かけたくないし。」

「逆に少しくらい迷惑かけた方がいいかもよ。」

燐は自分の弁当を口に運びながら言う。

「…そうだよな。」

実際、アゲハも気づいてはいる。榊原家の一員になってから一週間、一回も家族らしい振舞いをしていない。

「まぁ〜俺は言うことしか出来ないからさ。」

「いろいろ言ってくれてるだけでも、かなり力になってるよ。」

燐は小学校からの親友であり、いつも明るく支えてくれていた。アゲハはとても感謝している。

「ハハハ。そうか??照れるなぁ〜。」

と言いながらも、照れている素振りもにせず笑っている。

「じゃぁ〜そろそろ戻るわ。次の数学の宿題終わってね〜んだわ。」

燐はいつの間にか食べ終わった弁当を片づけている。

「お前、いつ弁当食べたんだよ??」

アゲハは燐に問う。

「アゲハが喋ってるときとか、何か考えてる間に食べた。」

自慢げに燐は話す。

「そっそうか。それにしても早いぞ。」

「だろっ??…それじゃ～宿題済ましてくるわ。」

燐は片づけ終わった弁当を片手に教室を出て行った。

一人になったアゲハは、まだ手を付けていなかったパンを食べ始める。

（この後、どうしよう。）

と、考えてみる。

人付き合いが苦手なアゲハにとって、友達と言える人は燐しかいない。

昼休みに出来ることをいろいろと考えていると、いつの間にかパンを全て食べ終えていた。

（次の授業の予習もしたし…。）

特にすることのないアゲハは、残り３０分ほどの休み時間を寝て過

ごすことにした。

「お母さん。…お母さんどこ??」

《ガタッッ》

勢いよく起き上ったアゲハの額には、少し汗をかいているのがわかった。

（またあの夢だ。）

夜中に見た夢とまったく同じ夢を見た。

すると、すぐに頭痛が襲ってきた。

しかし夜中ほどの痛みはなく、そのまま授業を受けることにした。

「全員いるねぇ～。それじゃ～授業、始めるよぉ～。」

数学の授業兼、アゲハのクラス担任である平野　瑞穂が開始の合図をする。

瑞穂は、おっとりとした性格と生徒と近い年齢のためか生徒に友達

感覚で接せられている。

「ここの問題、誰か解いてもらえる～？？」

と言っても、誰一人として手を挙げる者はいない。

「指名しないと誰も答えないぞ。」

男子生徒が言う。

「じゃぁ～今日の日にちと出席番号が同じの人ぉ～。前で答えをかいてね。」

すると渋々立ちあがった生徒が黒板に答えを書きだした。

答えを書いてもらっている間、瑞穂はクラス中を見回っている。

そして、書き終えた生徒はすぐに席に着いた。

「ありがとぉ～。」

そう言った瑞穂は問題について解説を始めた。

「ここの問題、公式を使うと簡単に解けるんだよ。まだ習ってないけど知ってるかな？？」

と、生徒名簿に目をやる。

「えぇ～と。黒神君。わかるかな？？…黒神君！？」

アゲハの名前を呼ぶが反応がない。

「珍しいねぇ～。黒神君が寝てるなんて。」

と言いながら、アゲハの席に近づいていく。

「起きてよぉ～。」

アゲハの背中を軽く叩きながら言う。

「…黒神君??大丈夫??」

アゲハの様子は、どう見ても変だ。息遣いも荒い。何回呼びかけても反応がない。

「黒神君っ!!…病院連れて行かなくちゃっ。」

瑞穂はすぐに携帯を取り出し、救急車を呼んだ。

すると、すぐにやってきた救急隊員によって学校から運び出された。

病院ー1

（…ここは??）

目を覚ましたアゲハの目に映ったのは真っ白な天井であった。

ふと自分の腕に目をやると点滴であろう管が繋がっていた。

（病院か。あのまま運ばれたのか…。）

この部屋には外に繋がる窓らしきものが見当たらない。地下なのだろうか??

唯一の窓は厚いガラスで作られている。

そして、その窓を見ていると看護師であろう女性が通った。彼女はアゲハの方に目をやると慌てたように視界から消えて行った。

《コンコンッ》

「黒神君。入ってもいいかな??」

女性が消えてからすぐにノックが聞こえてきた。

ノックの後に白衣を着た年配の男性が重そうなドアから顔をのぞかした。

「はい。どうぞ。」

そう答えると後ろに看護師を二名引き連れて入ってきた。中には先ほどアゲハを見て慌てていた女性の姿もあった。

「どうだい??調子は。」

年配の男性医師はアゲハに向かって話しかけた。

「まだ頭が重いような気がしますが大丈夫です。」

と、ベットから上半身を起こしながら答えた。

「久しぶりだね。黒神君。元気にしてたかい??」

「元気は元気ですけど…ここ病院ですよね??」

「ハハハ。そりゃそうだ。何かあったから、ここにいるんだよね。」

男性医師は体を軽くのけぞりながら笑った。

「で、香坂先生。俺はどうゆう状態なんでしょうか??」

香坂と呼ばれた医師は、アゲハの質問を聞くとさっきまでの朗らかな表情から真剣な眼差しに変わった。

「すまないが先に戻っていてくれないかい??」

香坂はカルテの整理などをしている二人の女性看護師に言った。

「あっはい!!」

「……」

一人は香坂に言われるとすぐに返事をし、あわただしく病室を後にした。
一方、もう一人の女性看護師は慌てた素振りは一瞬も見せずに一礼をしてから病室を出て行った。
あわただしい看護師と冷静な看護師。まったく逆である。

「すまないねぇ。あわただしいのと無愛想な子たちで。」

と、二人が出て行ってすぐにこう言った。

「そんなことないですよ。仕事熱心じゃないですか。」

「そうなんだよ。仕事熱心なんだけど、ミスが多くて。…おっと。また話がそれたね。」

香坂は
失礼するよ。
と言い、ベット近くの椅子に腰かけた。

「いろいろ話すことはあるんだが、まずは君の過去について話さなければならない。」

「俺の過去…ですか。」

アゲハは一瞬びっくりした表情を見せたが、すぐに悲しい表情を見せた。

「そうだ。君の過去についてだ。その話をする前に聞きたいことがある。」

「はい。何ですか??」

アゲハは香坂にたずねた。

「超能力を信じるかい??」

「えっ??超能力??まあ幽霊とか信じてるから超能力もあると思いますが…」

「なら話が早い。君の両親は誰かの手によって殺されたことは、もちろん君は知っているね。だが、君の両親が殺害されたのには超能力が関係していたんだ。」

「えっ…。」

あまりにもいきなりな話にアゲハは言葉を失った。

「君の家系は特別強力な超能力者の家系だったんだ。」

「仮にそれが本当のこととして、俺にそんな能力はありませんよ??」

「君が能力の事を知っていたなら、こんな話はしなくていいからね。」

と言って、香坂は女性看護師が置いて行った箱に手を伸ばした。
そしてその箱から何かを取り出した。

「それは…両親の形見のペンダント。」

「そう。悪いが君の診察の妨げになったから、預からせてもらっていたよ。」

香坂はペンダントをアゲハに返す。

「で、これにはどんなことが??」

「おそらくだが、これには黒神君の能力を封じるためのものらしい。君は両親の形見とゆうこともあり、肌身離さず持っていた。それで能力に気付けなかったんだと推測している。調べていないから確実とは言えないが…」

「…ペンダントのせいで能力に気付けなかったわけですか。」

ペンダントに目を落としながら両親のことについて考え込んだ。

「これもまた推測なんだが、君の両親を殺した犯人は黒神君のことを知らなかったんだと思う。」

「何でですか??」

正直、両親の命日のことについては記憶が曖昧である。家族を失ったことのショックによる一時的な記憶喪失だと香坂は言っている。
そのせいか、自分はたまたま生き延びれたと思っていた。

「たぶん犯人は、君の家系を根絶やしにし、新しい子孫を残さないために君のご両親は殺されたんだろう。つまり、君の存在に気づいていれば、どんな手段を使ってでも君を殺しているはずだ。」

このことを聞いたアゲハの表情は恐怖と悲しみに包まれているように見えた。

「…それなら、俺を守るために…。俺のせいで父さんや母さんが死んだんだ。」

自分のせいで両親が死んだんだと考えると、自然に悲しみの涙が流れた。

「それは違う。君のせいでご両親が殺されたなんて思ってはいけない。そのペンダントを見ればわかる。君の存在を知られないために…自分のたった一人の息子を守るためにお亡くなりになったんだ。自分の子に生きてもらいたいから…。」

アゲハの目には先ほどの悲しみは消え、両親への感謝や両親の分の人生も強く生きて行こうと決めた決意の涙が流れていた。

「どうだ??落ち着いたかい??」

アゲハが落ち着くのを待ってから香坂はアゲハに声をかけた。

「…はい。…で、話の続きを…。」

アゲハはとても悲しかった。しかしそれ以上に自分の過去について。家族について知りたかった。

「話はここまでだ。」

香坂はきっぱりと言い放った。

「ちょっと待ってください。まだ詳しいこととか聞かせてください。」

「私も話してあげたいんだが、ここでは話せなくてね。」

と言い、香坂は席を立ち、出口のドアに向かった。

「ならどこで聞けばいいんですか??教えてください。」

すると香坂は出口の前で立ち止まり、こう言った。

「君には全てを知る勇気があるか??今まで築いてきたものを失うかもしれない。それでも君は全てを知りたか??」

「……」

あまりに突然の事にアゲハは黙り込んでしまった。

「答えはすぐに出さなくていい。じっくり考えなさい。もし全てを知るなら、引き返すことは出来ないからね。」

と、言葉を残して香坂は病室を後にした。

香坂が立ち去ったあと、彼の言った言葉について考えた。
今まで積み上げてきたものがなくなるかもしれない…。おそらく今の家族や友達の事だろう。
自分の両親の事も知りたい。しかし、全てを失うのは怖い。

《コンコン》
するとノックする音が聞こえてきた。

「どうぞ。」

とアゲハが言うと一人の看護師が入ってきた。さっきのあわただしい女性看護師だった。

「あっあの。えっと…。なんだっけ??…そうだ!!違う病室に移動してもらえますか??」

「あっはい。わかりました。」

と答えると、女性看護師は満足そうに部屋を出て行こうとした。

「あのっ。すみません。」

「なんですか??」

彼女は満足感に満ち溢れた笑顔で振り返った。

病院―2

「移動するのはわかりましたけど、どこの病室ですか??」

すると女性の笑顔は消え、再び慌てだした。

病室番号が書かれているであろうメモ帳を取り出そうとしているのだが、床に落としたりページが見つからなかったりと、余計慌てているように見えた。

「あの…。そんなに急がなくてもいいですよ。」

「私のミスですから。患者さんにお待たせしては…。…あった!!」

と、ページを見つけると同時に大きな声を出した。

「えっと。これによるとですね。えっと、２２４号室になります。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「いえいえ。時間ばかりとって…。すみません。」

彼女はペコペコと頭を下げながら部屋を後にした。

アゲハはこの病室を出るために、荷物の準備に取り掛かった。準備といっても荷物はあまりないので、すぐに終わった。

その荷物を持って病室を出ると、左右に広がる長い廊下があった。

ふと右側を見るとエレベーターがあるのが見える。

アゲハはエレベーターに乗り、二階に向かうためのボタンを押した。

しばらくするとエレベーターのドアが開いた。
そこには病院にしては賑やかなロビーが目に入った。

「お～い。アゲハ～。」

と、ロビーの方から声が聞こえてきた。

「あっ！！愛花さん。すみません。心配かけました。」

「ホントに心配したよ。アゲハが倒れたって聞いたから…。」

「それでわざわざ来てくれたんですか。ありがとうございます。」

アゲハは軽く頭を下げる。

「後からお母さんとかも来るから。先に病室で待っておこ？？荷物貸して。」

と言ってアゲハから荷物を受け取った。

「荷物くらい持ちますよ。」

「いいのいいの。今日は病人なんだから、私に任せなさい！！」

と荷物を持ってない方の手で病室に向かってアゲハの背中を押していく。

「やっと着いた〜。まさかこんな端っこの部屋だなんてね。」

と、言いながら部屋のドアを開け、中に入っていく。

愛花の後に続いてアゲハも入ると、白を基調とした清潔感漂う部屋が視界に飛び込んできた。

綺麗に整えられたベット。窓際には花が置かれており、外の風景とすごく合っていた。

「すごく綺麗だね。」

愛花は部屋を見渡しながら言う。

そのあと荷物を机の上に置き、ベット近くの椅子に腰を下ろした。

アゲハもそのあとに続き、ベットに腰かけた。

「あの。俺が病院に運ばれた時、学校はどうなりました??」

「学校??それはすごかったよ。いくつかのクラスは自習になったり…。大騒ぎだったよ。」

「学校にも迷惑かけたか。」

アゲハは、いかにも落ち込んだ様子で言った。

「もう調子はいいの??」

愛花はアゲハにたずねる。

「はい。学校で気を失ったのが嘘のようですよ。」
と、笑いながら答えるアゲハ。
「！！……」
なぜか驚いた様子でアゲハの顔を見る愛花。
「えっ??何か変なことを言いましたか??」
「変なことは言ってないよ。ただ、初めてアゲハの笑顔を見たなって思って。」
「そんなに笑っていませんでしたか??」
「笑ってなかったよ。家に来てからずっと恐い顔だったし…。」
「笑ってるつもりだったんだけどな。」
わざとらしく髪をかくアゲハ。
「全然笑ってないよ。」
「そうか??」
「そうだよ。」
「「アハハハハ」」

二人は声をそろえて笑い出した。
実の家族の愛を知ったからなのかどうかはわからないが、久しぶりに思いっきり笑えたような気がした。
「どうしたの??すごく楽しそうじゃない。」
と、病室に皐月が入ってきた。
「あっ。お母さん。着いたんだ。」
先ほどまでの笑顔を残したまま、愛花は母を迎えた。
「アゲハが病院に運ばれたって聞いたから急いで来たけど、前より元気そうね。」
母、皐月は愛花の横に歩み寄り、もう一つあった椅子に腰かけた。
その顔には、態度には出さないが安堵の表情が見えた。
「ほら。何してるの??入って来なさい。」
と、皐月が入り口の方へ声をかけると三女である千鶴が顔をのぞかした。
「千鶴っ。おいで。」
と、愛花も呼び掛けるとゆっくりとドアを閉め、部屋に入って来た。
しかし、近づいたものの皐月と愛花の間に隠れ、アゲハを避けているようだった。

「何隠れてるの??」

と皐月がたずねると

「アゲハ兄ちゃんじゃ…ない。」

三人は千鶴の言ったことの意味が分からず、考えていると再び口を開いた。

「兄ちゃんが…笑ってる。…兄ちゃんは…笑わない…のに。」

そう千鶴は言った。

それを聞いた皐月と愛花は笑いだした。

千鶴は笑っている二人を見てきょとんとしている。

「千鶴。アゲハだって笑うわよ。」

「兄ちゃん…笑うん…だ。」

千鶴はそう思いながらアゲハの顔を眺めている。

「アゲハだって何か言いなさいよ。無愛想なキャラで定着するよ。」

そんな三人の会話をにこやかに見ている皐月。

「えっと…。千鶴ちゃん。俺だって一応笑うからね。」

そのことを聞いて、千鶴は縦に首を振った。

だが、納得はしていないようである。

にぎやかな雰囲気のまま笑っていると、病室に一人の女性が息を切らして入って来た。

「あっあの。私、平野瑞穂といいます。あの…黒神君、大丈夫??」

と言いながらも、多少息が切れているため、下をうつむいている。学校からすぐに来たようで、スーツ姿である。

「大丈夫ですよ。心配かけました。」

「よかった。大丈夫なんだね。」

大丈夫という言葉を聞くと、とても安心した様子を見せた。

「まあまあ。先生も腰を下ろしてください。」

皐月は瑞穂の近くに椅子を差し出した。

「お構いなく。私はすぐに帰りますので…。黒神君の様子を見に来ただけですから。」

「そうですか。ゆっくりしていただいてもいいのですが。」

と、皐月は言う。

「いえいえ。私が居ては、黒神君も落ち着いて休めないと思うので…。あわただしくなりましたが、これで失礼します。」

そう言って、瑞穂は一礼をし、ドアに向かった。
最後に「お大事に。」と言葉を残して病室をあとにした。

「愛花。千鶴。そろそろ帰る??」

皐月は二人に声をかけた。
愛花と千鶴は帰ることなど考えていなかったようで、きょとんとしている。

「じゃあ、母さん達帰るから、ゆっくり休みなさいよ。」

と、半ば強制的に二人を病室から連れ出しながら言った。
そして、「ゆっくり休むのよ。」と念を押し、皐月たちの姿はドアの隙間から消えた。

アゲハ以外誰もいなくなった部屋は、急に何かを失ったみたいに冷たく感じられた。

まだ残っている、わずかな家族の温もりを感じながら、アゲハは目を閉じ眠りについた。

退院

物音一つしない真っ白な部屋の中にカーテンからもれた、まっすぐな光がアゲハの寝顔を照らす。
すると、静かだった部屋に、寝起きの良さそうな声が響いた。

まだ寝起きでおぼつかない足を引きずりながら部屋の隅にある洗面所に向かった。

洗顔など一通り済ました後の顔は、先ほどまでの眠そうな雰囲気を感じさせなかった。

「よしっ！！」

と声を出し、荷物の整理にとりかかった。
整理といっても荷物という荷物がないので、病室の掃除をすることにした。
別に掃除をしなくてもいいのだが、幼いころから孤児院で育ったアゲハは身の周りの掃除や整理について厳しく言われていた。

最後にベットを整え終えたアゲハは、時計が置いてある机に目を向けた。

（まだ一時間もあるな。）

あと一時間、何をしようかと思いながら、たまたま手に取った携帯にメールが来ていた。
そのメールの送り主は燐だった。
受信時刻を見てみると、アゲハが寝た後すぐに送られたものだった。
内容は
「病院どこだ！！」
それだけであった。
受信してから時間がたっているので、返信するのが面倒だ。
しかし、心配して送ってくれたのだから
「今日の午前中に、退院するから。」
と返信することにした。
すると、すぐに
「今日退院するんだ。学校で待ってるから、完全に治して早く来い。」
と、返信が来た。
それに返事のメールを返したアゲハは病室に荷物を残したまま、部屋を出た。
退院まで時間のあるので、エレベーター前のフロアに行くことにし

た。

そのフロアに入ったアゲハは近くにあった自動販売機に向かい、飲み物を買って席についた。

午前中で面会時間もまだ来ていないせいなのか、フロアにはアゲハ以外誰もいなかった。

自由にお使い下さいと書かれたテレビの電源を入れ、別に好きでもないニュース番組を見ながらくつろいでいると、フロアに一人の女性とアゲハと同じか、もしくはそれ以上の身長がある男性が入って来た。

男性は入り口付近で立ち止まったが、女性はどんどんとアゲハのもとに近づいてくる。

やがて目の前に来た女性は、アゲハをじっと見つめだした。

「あの…何か用ですか??」

と、女性の行動を不審がりながら問う。

「お前は、どうするんだ??入るのか??」

と、意味不明な答えが返ってきた。

質問の意味が全く分からず困惑していると、女性はアゲハの答えを聞かないまま後ろを振り返り、入り口へ歩き出した。

そのあと、入り口で待っていた男性と一緒にフロアから姿を消した。

先ほどの女性の質問について考えながら残り少しの飲み物を口に含み、席を立った。

アゲハがくつろいでいる間に意外と時間がたったのだろう。
廊下には患者の姿や看護師たちの仕事ぶりを見ることができる。

アゲハは、そろそろ退院のために迎えに来てくれるだろうと考え、病室に戻った。

病室で携帯をいじりながら過ごしていると、ノックの後に病室のドアが開いた。

「黒神さん。迎えの方が来られていますよ。」

「わかりました。すぐそこのフロアでいいんですよね??」

アゲハは自分の荷物を手に取りながらたずねる。

「いえ。そのまま一階に降りていただいたらいいので…。それでは失礼します。」

アゲハは看護師の方にお礼を言い、太陽の日に照らされ白く輝く部屋を出て行った。

「アゲハ〜。ここだよぉ。」

一階に降りてみると玄関近くで愛花が手を振って呼んでいた。

「皐月さんは??」

周りを見渡してみたが見つからないため愛花に聞いてみる。

「母さんなら精神科の先生の所にあいさつしに行ったよ。なんか、父さんの知り合いのお医者さんらしくて。」

「もしかして香坂さんのところ??」

アゲハの知っている唯一の精神科の医師の名をあげてみた。

「そうだよ。アゲハ知り合いだったの??」

「小さい頃にお世話になったんですよ。」

「そうなんだ…。」

アゲハの実の両親の事でお世話になっていたことを知って、まずいことを聞いてしまったと愛花は言葉を詰まらせた。

するとそこに香坂と皐月がそろって歩いてきた。

「ごめんね。話が長引いちゃって。」

と、言いながら皐月が二人のもとに歩いて来る。

「あっ!!お母さん。遅かったね。」

愛花が言う。

「愛花ちゃん、すまないね。私が話を長くしてしまってね。」

「いいですよ。アゲハと話してたし。」

香坂の言葉に愛花がそう返すと、香坂は「そうか、そうか。」と言い、笑顔になった。

「それでは、そろそろ失礼しますね。」

と皐月は一礼をし、アゲハ達を連れて歩き出した。
愛花もアゲハも香坂に頭を下げ、皐月のあとを追った。

「ちょっと。黒神君。」

出口に向かうアゲハを香坂は呼びとめた。
皐月は「先に行ってるね。」と出て行った。

「香坂先生。何でしょうか??」

「例の事だけど…。返事は早いだろうけど、次の日曜に来てくれるかな??」

とても真剣な表情でアゲハに問う。

「日曜ですか…。はい。わかりました。」

「そう簡単に決めれることじゃないが、よろしく頼むよ。」

「それでは失礼します。」

とアゲハは病院の出口へと姿を消した。

選択

病院を出発し自宅に着いたアゲハは、すぐに自分の部屋にこもった。
香坂の言っていた組織らしきものに入るのか考えたが、いっこうに答えが出そうにない。

超能力とは何なのか。
物を動かせる力なのか。それとも物体を瞬間移動させることが出来る力なのか。

今までに考えたことのない未知の世界に動揺しつつも、答えを見つけようと悩み続けた。

自分の人生の分岐点であるこの選択は、家族や周りの人たちまで影響を与えるかもしれない。

何時間考えたことだろう。
一階から皐月の声が聞こえてきた。

「アゲハ～。夕ご飯出来たから降りてきなさい。」

アゲハはその声に返事をし、一階へと降りて行った。

夕飯を食べるため、一階のキッチンに降りた。

そこには、父である獅郎を除いて家族がそろっていた。

「薫姉さん。帰ってたんですね。」

アゲハは長女である薫に話しかけた。

「アゲちゃんが帰って来た、すぐ後に帰って来てたんだよ??アゲちゃん、ずっと部屋にこもってるんだもん。」

アゲハは薫と話しながら席に着いた。

薫はアゲハと会ったときからアゲちゃんと呼んでいる。最初は薫と話す勇気もなく、理由を聞かなかったが、最近話すことに慣れたので理由を聞いてみた。

薫が言うには、特に理由はなく、ただ単に可愛いから。だそうだ。

「病院から帰ってすぐに部屋にこもったけど、何かあったの??」

食事に手をつけようとしたアゲハに皐月が聞いた。

「あ〜。別に何でもないですよ。」

そう言って曖昧な答えを返す。

「そう…。何でもないならいいんだけどね。」

皐月は少し心配そうな顔を見せたが、詮索しないでくれた。

家族全員が楽しく会話しながら食事をしている中、アゲハだけが黙々と箸を口に運んでいた。

すると、玄関の扉が開くような音が聞こえた。
どんどんと足音が近づいて来て、キッチンの扉が開いた。
「おかえりなさい。」
キッチンに入って来た獅郎を皐月が出迎えた。
「すまないな。仕事が長引いてしまって。」
そう言いながら自分の席についた。
皐月はすかさず獅郎の茶碗を取り、ご飯をよそいだした。
「アゲハ。大丈夫だったのか??」
「はい。別にたいしたことなかったので。」
「体には気をつけるんだよ。」
獅郎はアゲハに声をかけた後、皐月の持ってきた夕飯に箸をつけた。
「ごちそうさまでした。」
獅郎より先に食べ終えたアゲハは自分の食器を流し台に持っていく。
皐月に食器を手渡し、自分の部屋がある二階へ向かった。
キッチンから出る直前に隣の部屋にいた薫がアゲハに向かってほほ笑んだように見えたが、はっきりと見ていなかったので気にも留めずキッチンをあとにした。

一歩外に出ると、まるで違う世界に出てきたような静寂が待っていた。

よく耳を澄ませばドア越しの家族の話し声と一歩一歩と階段を踏みあがっていく自分の部屋へと向かう足音だけが響いていた。

部屋に着いたアゲハは椅子に座るとすぐに教科書を探し始めた。

（…また明日から学校か。…面倒だな。）

皐月はもう一日休めと言ったが、面倒と言いながらも出来るだけ休みたくないので学校に行くと言った。

明日の授業分の教科書を詰め終えたアゲハは、ベットに向かい眠りについた。

アゲハが寝静まった夜中、アゲハの部屋のドアがゆっくりと開き、誰かが入って来た。

その人物はドアを閉めるとアゲハの枕元へと近づいていく。

まるで、いたずらをする子供のような笑みを浮かべながら、アゲハの耳元で囁いた。

「アッ君。起きなさ〜い。」

声に反応し目を覚ましたアゲハは、眠そうにあたりを見回した。
アゲハのすぐ横にいた人物に気づくと、飛ぶように起き上り距離を取った。
そして、驚いた表情を隠しきれないまま口を開いた。

「かっ薫姉さん！？」

「やっと起きた。」

部屋に侵入しアゲハを起こした薫は、驚いているアゲハを見て笑いながら言った。

「何で姉さんがここにいるんですか？？」

「夕食の時とかに元気なかったから、姉さんが相談に乗ってやろうと思ったのさ。」

薫はとても自信があるのか、「何でも聞きなさい。」と目で訴えかけていた。

「別にいいですって。そんなたいしたことじゃありませんし。」

「そんなに私と距離を置かなくてもいいじゃん…」

顔をうつむけて一段下がった声のトーンで言った。

その声を聞いたアゲハは…

「あの…その…距離を置いてるわけじゃないですよ。」

「じゃあ～姉さんを頼ってくれる??」

うつむいていた顔を上げ、今にも涙が流れそうな目をあらわにした。

「それじゃあ、相談に乗ってくれますか??」

アゲハは少し困った表情を見せながら渋々答えた。

「ホントに!?ヤッタ～!!…で、何が悩みなの??」

そう言う薫の表情は、先ほどまでの悲しそうな顔を微塵も感じさせない笑顔になっていた。

アゲハは内心、騙されて薫に乗せられたことに後悔していた。

「で、何なの何なの??相談内容って??」

明らかに目を輝かしている。

「えぇ～まあ。…これからどうしようかと思いまして。」

「これからって??」

薫の表情は先ほどとは違い、弟を温かく見守るような温かいものとなっていた。

「薫姉さん。もし、危険だとわかっている道と今まで通って来た安全な道があれば、どちらに進みますか??」

突然の質問に少し考えるような素振りを見せたが、薫はこう答えた。

「私はいつも通りの安全な方を選ぶかな??危険とわかっていて進みたくないし。周りも危険になっちゃうかもだしね。」

その言葉に何か引っかかるものがあったが周りを危険にあわせない為なら当然だと、自分に言い聞かせた。

「そうですよね。ありがとうございます。」

「自分から相談してって言ったのに、大したこと言えなくてごめんね。」

「そんなことないです。俺にとって役に立つと思います。」

アゲハは薫に笑顔を向けた。

「アッ君は優しいね。」

そう言いながら出口のドアに向かい、ドアノブに手を掛けていた。

「長居してごめんね。それじゃあ、おやすみ。」

薫の姿が見えなくなるのと同時に、ドアが動き出した。

しかし、閉まり切る直前にドアの動きが止まり、再び薫が顔をのぞかした。

「やっぱり私、危険かもしれないけど、周りに迷惑かけるかもしれないけど、危険な道を進むかもしれない。だって、そこを抜ければ新しくて楽しいことが見つかるかも知れないから。」

今まで見たことのない美しい笑顔とこの言葉を残して、部屋から出て行った。

その言葉はアゲハの心を惑わすかもしれないが、心の奥深くまで響いたに違いない。

苦慮―1

目が覚めたら朝になっていた。
薫に相談したことについて考えているうちに寝てしまったんだろう。
目覚ましがうるさくなる前に起きてしまった。
昨日、遅く寝たにもかかわらず頭の中は昨日の夜の事でいっぱいで、まったく眠くなかった。
アゲハはすぐに学校に行く用意をし、一階のキッチンに降りた。
そこでは母、皐月が家族分の朝ごはんを作っている最中だった。
「今日は起きるの早いわね。」
アゲハに気づいた皐月が声をかけてきた。
「おはようございます。皐月さん。」
自分の席に座りながら、挨拶を返す。
「もうちょっと待っててね。少し前に作り始めた所だから…」
「いいですよ。気にしないでゆっくり作ってください。」
そう言って机に目をやると、二人分の食べ終わった食器が並べられていた。

「獅郎さんと薫姉さん、もう出たんですか??」

相変わらず料理の手を止めないまま、皐月は答える。

「二人とも仕事が忙しくなるから、今週の日曜まで帰ってこないんだって。何か捜査があるみたいに言ってたわよ。」

実は獅郎と薫は警察官である。

獅郎は警察の中でもかなり上の地位だそうだと聞いたことがある。

薫は新人の中でもかなり期待されている逸材だと、獅郎が自慢そうに話していた。

「えっ??泊まり込みで仕事なんですか??」

「そうよ。この前殺人事件あったでしょ??あれの捜査が難航してるみたい。」

それを聞いてアゲハは、少しがっかりした。

嫌がってたものの、もう一度薫に相談して意見を聞きたかった。

こうして皐月と話しているうちに、愛花、千鶴の順にキッチンに現れた。

とても眠そうな顔をしている。

「おはよ〜。」

愛花は、あくびをしながらこう言った。

その後ろから目をこすりながら、トコトコとついて来ている。

「愛花さん。千鶴ちゃん。おはよう。」

アゲハが二人に声をかけると愛花は自分の食事の席について、手をひらひらさせながら「おはよっ」って言ってきた。
千鶴はアゲハの近くまで来て、ペコリと頭を下げると自分の席に着いた。

「はいっ。ご飯出来たよ。」

そう言いながら三人の前に食事を置く。

「いただきます」と一人一人が言うと黙々と食べ始めた。

千鶴は、嫌いなものがあったのか野菜を端によけながら食べていると、そのことを皐月に怒られ、ビクビクしながらも野菜を口に運んでいた。

「ごちそうさま。」

一足先に食べ終えたアゲハは、いつも通り食器を片づけ学校の用意をするために二階へと上がっていった。

「お母さん。何かアゲハの様子おかしくない??」

「そう??」

愛花の問いに、皐月は目玉焼きを口に運びながら答える。

「絶対おかしいよ。だって、私たちと話してる時は普通だけど、ひ

とりでいるときなんて、すっごく暗い顔してるもん。」

「そうなの??お母さんと話してる時は何も変わらなかったけど…」

こうして愛花と皐月が話している間に、準備を終えたアゲハが降りてきた。

「ちょっと早いですけど、行ってきます。」

「えぇっ!!スッゴく早いよ。少し待ってて。今すぐ準備してくるから〜。」

愛花は椅子から飛び上がると、叫びながら二階にある自分の部屋へと走っていった。

アゲハは階段から、騒がしくなっている二階に向かって

「今日は早く行きたいので、先に行かせてもらいますね。」

と、言葉を残して玄関に向かった。

「それじゃあ皐月さん。いってきます。」

見送りに来てくれた皐月に言葉をかけて、玄関の扉を開けた。

「アゲハ。制服のボタン、掛け違えているわよ。珍しいわね。」

「えっ??あぁ〜すみません。ありがとうございます。」

アゲハは手際よくボタンを直し、もう一度、皐月に声をかけて、外に出た。

後ろからは、「気をつけてね。」と、優しい声が聞こえた。

外に出ると、いつもは学校に向かう生徒を見かけるのだが早く家を出たためか生徒の姿は一つもなかった。

道路では、会社に向かうのであろうスーツを着た男性が車に乗って横を通り過ぎて行く。

いつも歩いている道なのに、人が少ないだけで、こんなにも景色が変わるものなんて知らなかった。

しかし、アゲハは周りには目もくれず足早に歩いて行く。

そよ風に吹かれる木の葉も、暖かく降り注ぐ陽の光も、アゲハにとって、ただ気持ちを苛立たせるものにしか感じられなかった。

自分の一生を決める決断をするまで時間がないというのに、いつもと変わらずのんびりとしている周りがうらやましくも、腹立たしくも感じられた。

一分一秒でも無駄にしたくないアゲハは、ずっと自分の結論を探しながら歩いた。

考え事をしながら歩くと、いつも長く感じられる通学路も一瞬に感じられた。

いつもより早く学校に来たため、生徒の姿は　ほとんど見られなかった。

いつも通り靴を履き換え、教室に向かった。

そこには誰も居らず、独り席に着いた。

アゲハにとって、誰もいない静かな空間は、自分に向き合えるとてもいい場所だった。

しかし、３０分もすると教室がにぎやかになり始めた。

この３０分間だけでは、考えが何一つまとまらなかった。逆に、時間の少なさを思い知らされるものになった。

そうしているうちに、教室にはいつも遅刻する生徒を除いて、全員がそろっていた。チャイムが鳴ると今まで騒いでいたのが静かになり、そのあと担任の瑞穂が入ってきた。

すぐさまホームルームを終わらせ、一時限目の数学の授業に取り掛かった。

「どこまで進んだっけ??」

いつも通り一番前の席の人のノートを覗き込み、授業の進み具合を確認する瑞穂。

「じゃあ～この問いの続きからね。」

そう言って、時折生徒に質問しながら黒板に解説を黙々と書いていく。

「この問題、ちょっと難しいけど、今日の日にちと出席番号が同じ人、解いてください。」

すると指名された男子生徒が手をあげて
「すみません。まだ解けていません。」
と言った。
「そう…。じゃあ毎回悪いけど、黒神君。お願いします。」
アゲハを指名したが、本人からは何の応答もなかった。
「黒神君??」
「えっ??あ…すみません。どの問題ですか??」
「問5よ。黒神君がボォ〜ってしてるなんて珍しいわね。」
「…すみません。」
そう一言謝ると、アゲハは黒板に回答を書き始めた。
アゲハはいつも通りすらすらと回答を書いていった。
「先生。出来ました。」
そう言って自分の席に帰っていった。
「えっと…この答えは…。あっ!!ここミスしてるね。書き直してくれる??」
瑞穂が問いかけると、アゲハはすぐに黒板の答えを訂正した。
誰から見てもいつもと違うアゲハを心配しながらも、瑞穂は授業を

進めて行った。
残りの授業の間、アゲハはノートも書かずただ静かに座っているだけだった。
学習範囲が次の範囲に入ろうとしたときにチャイムが終わりを告げた。
瑞穂が教室から出て行った瞬間、アゲハの周りにはすごい人だかりができた。
「どしたんだよ??お前が間違えるなんてな。」
「アゲハ君、大丈夫??」
男やら女やら一回も話したこともない人までが口々にアゲハを問いただした。
「…お……う…さい。」
すると、アゲハは小さな声で何かを言いだした。
「おい。何言ってんだ??聞こえねぇぞ。」
「お前ら、うるせぇんだよ!!」

苦慮―2

いつも静かなアゲハが上げた大声に周りの生徒は静まり返った。

その声は廊下中に広がったのか、隣のクラスの生徒まで集まり出した。

しかしアゲハには周りなど目に入っていなかった。

「いつもと違う??いつもの俺じゃない??ふざけんな!!じゃあ、いつもの俺って何なんだ。お前らが勝手に俺のイメージ作って、勝手に期待してるだけじゃないか。」

いつもなら騒がしい教室も廊下も、アゲハ一人の声だけが響いている。

「数学の問題をミスしただけで人が集まって、何があった、どうしたって聞いてくる。お前らとは、まともに話したことないのに馴れ馴れしく話しかけんな!!」

言い終わると同時にカバンを担いで教室を出て行った。

あまりの迫力に固まっていた生徒もアゲハが近づいてくるとすぐさま道を開けた。

集まってきた人の中には愛花の姿もあったが、一度も見たことがないアゲハに、恐くて動くことが出来なかった。

アゲハは廊下を足早に歩き、階段のところで愛花からは見えなくなった。

アゲハが去った後でも誰も動かなかった。

しかし、一番最初に沈黙を破ったのは愛花だった。

愛花は、すぐさま自分の教室に走っていき荷物を持ってアゲハの後を追った。

途中、教師に会うこともあったが、そんなこと気にしている場合ではなかった。

愛花はアゲハを追いかけて一生懸命走った。走り走ったが、アゲハの姿を見つけることは出来なかった。

（何であの時、すぐに追いかけることが出来なかったのか。）

とても後悔した。

けれど諦めるわけにはいかなかった。あの時のアゲハの目は、とても悲しそうで自ら孤独を求めようとしているように感じられたからだ。

愛花は、アゲハが向かいそうな場所を探しまわった。

まずは自分の家に戻ってみた。

ちょうど皐月は出かけていたのか家には誰もいなかった。

もちろん愛花もアゲハも鍵を持っていないので、アゲハが居るわけがなかった。

次は町はずれにある病院に向かった。最近までアゲハが入院していた病院だ。
そこにいる精神科の医師である香坂と知り合いのようだったからである。
愛花はすぐに電車に乗り、そこへ向かった。
電車で十五分ほど移動し、バスに乗り換えて、しばらくすると病院についた。

愛花はバスを降りると、すぐに精神科のある病棟へと向かった。
そこについた頃、時計は正午を回ろうとしていた。昼食の時間なのだろうか、患者は少なく、すぐに香坂と会うことが出来た。

「香坂せんせぇ～。次が最後の患者さんで～す。でも、患者さんじゃないみたいです～。」

「それはどういうことなんだい??成海君。」

「それが、せんせぇ～のお知り合いみたいなんですよ。それじゃ～私はお昼食べてきますね～。」

成海は嬉しそうにスキップしながらカーテンの奥に消えていった。

香坂は少し疑問を持ちながらも最後の人を招き入れた。

「こんにちわ、香坂先生。榊原です。」

「おお。愛花ちゃんか。今日はどうしたんだい。」

香坂は、思いもよらない訪問者に驚きながらも話を続けた。

「ちょっとお話があって来ました。」

「そうかい。診察室じゃなんだから、こっちで話そう。」

そう言って、近くにある休憩室に移動した。

「で、いきなりなんですけどアゲハはここに来ませんでした??」

「黒神君かね??ここには来てないよ。」

「そうですか。私は急いでいるんで。」

と言って、出口へ向かう。

「待ってくれ。少し事情を聴かしてくれないか??」

愛花は立ち止まりこれまでにあったことを香坂に話した。

「そうだったのか。黒神君の居場所なんだが、私に心当たりがあるよ。」

「どこにいるか、わかるんですか??」

思ってもみない言葉だったので、愛花はとても驚いた。

「黒神君が孤児院にいたことはもちろん知ってるね。私が思うにそこへ行ってるんじゃないかね??」

その孤児院はアゲハが数年間育った場所。榊原家の一員となった場所であり、愛花がアゲハと初めて会ったのもその孤児院である。

「わかりました。さっそく行ってきます。」

「愛花ちゃん。」

愛花が部屋から出ようとすると、再び香坂に呼びとめられた。

「何でしょうか??」

「今の黒神君を助けてあげられるのは君だけだと思うんだ。何も言わなくたっていい。ただ、黒神君のそばから離れないであげてくれないか??」

その言葉からは医師としての立場からではなく、心からアゲハの事を心配しているのが感じられた。

「もちろんです。」

愛花は笑顔でそう返すと急いで病院から出て、アゲハの元へ向かった。

愛花は電車やバスを乗り継いで、やっと孤児院に着くことができた。今は使われていないのか、庭には草、建物にはツタが生えていた。その草の中に見える子供用の遊具が、かつて孤児院だったということを表していた。

（アゲハ、どこだろう??）

愛花はアゲハを探しながら、少し不気味な教会の中へと足を踏み入れた。

そこには、椅子に座り、ただ茫然と前を見つめたままのアゲハの姿があった。

愛花はすぐに声をかけようとしたが、あまりにも寂しく悲しそうな背中を見ると声が出なかった。

愛花はアゲハの元にゆっくりと近づき、隣に腰かけた。

二人は一言も喋らないまま刻々と時間だけが過ぎていった。

「…ごめんなさい。」

一時間ほどたっただろう頃、アゲハが口を開いた。

「ごめんなさい。…自分の事なのに他の人に怒りをぶつけて…。俺は最悪な奴だ。」

うつむいて顔を隠していたが、声は震えていた。

「大丈夫。私は気にしてないよ。そんなに自分で抱え込まないで…私にぶつけたっていいんだから。困らせたっていいんだから。そんなに悲しい顔しないでよ。」

そう言う愛花の瞳には涙が浮かんでいた。

アゲハに愛花の言葉はとても響いたことだろう。

しかし、何も言うこともなく、ただ肩を震わせていた。

「そろそろ帰ろう。」

アゲハの肩の震えが治まったのを見計らって声をかけた。

するとアゲハは何も言わず立ち上がり、外へと向かうアゲハの後ろをついてきた。

外に出てみると、太陽は地平線へと消えようとしていた。

あたりが暗くなりかけている道を、来た道順の通り帰った。

家に着いた頃、空は吸い込まれそうなほど真っ黒に染まっていた。

「ただいま。」

そう言って、愛花を先頭に家に入る。

「おかえりなさい。」

キッチンから皐月が出てきて、出迎えてくれた。

学校から連絡があって、今日の事は全て知っているであろうが、優しい表情でいてくれた。

いつも通りの会話、いつも通りの家族。
何も変わらない食卓を終えて、愛花と一緒に二階へ上った。
各自の部屋へと別れる前、アゲハが
「ありがとう。」
と、つぶやく声が愛花の耳に届いた。

変化―1

今日もいつも通りの学校である。
しかし、アゲハの足取りはとても重かった。
昨日の事が、身の回りにどれだけ影響を与えてしまったのか知るのが怖かった。学校へ行く途中、何度家に帰ろうとしたことか。

やっとのことで学校に着くことが出来た。
門に入るか戸惑っているときに燐が現れた。

「オッス。こんなところで何してんだよ。行くぞ。」

と言って無理やりアゲハの手をつかんで中へと引っ張って行った。

「ちょっと待てよ。」

教室へと向かう階段の前で、アゲハは燐の手を振りほどいて立ち止まった。

「そんなに気にすんなって。当たって砕けろ！！…もう砕けてるな。」

燐は笑いながら、アゲハに何も言わすことなく再び手を引っ張って行った。
燐は

「じゃあな。」

と言い残し、アゲハを教室の前に置いていった。
アゲハは勇気を振り絞り教室のドアを開けた。

自分が考えていた反応はなく、いつも通りの教室のように見えた。
しかし、席に着いた途端、周りからの冷たい視線を感じた。
そのまま授業になったが周りの目や残り数日に迫る選択が気になり、散々なものだった。

数学では足し算、引き算でミスをし、体育では何もない場所で転んでしまうほどだった。

それで笑われるくらいなら我慢できたが、クラスメイトの目は自分を軽蔑するように見てきた。

「大丈夫??」

そんな中、話しかけてくれる人もいた。

「…大丈夫です。気にしないでください。」

アゲハはそっけなくその場を立ち去ろうとした。

「私、村沢　沙慧［サエ］と言います。」

アゲハはその女の名前をすでに知っていた。同じクラスだからである。

他人との関わりを好まないアゲハは、クラスメイトだからと言って名前を覚えていない。

しかし、彼女だけは覚えていた。

アゲハと同じようにクラスの中で、いつも一人で居たからだ。
自分と同じような他人と関わりの少ない彼女に興味があった。

彼女は眼鏡に三つ編みという格好で、誰とも喋らないので虐められることもなく、話しかけられることもない、とても暗い存在であった。

「あっあの…。何かあったら、力になりますから。」

沙慧はそう言った。
沙慧もアゲハに興味があったのかもしれない。

アゲハはその優しい言葉に対して

「俺に関わるな。」

そう言ってその場を後にした。

アゲハはとても嬉しかったが、自分に関わることによって彼女が自分と同じような扱いを受けてほしくなかったのだ。
なので、あえて突き放した。

その後の授業も最低なものだった。
周りと自らの心の変化によって、ここまで自分を見失うものなのかと疑問を持ってしまうほどであった。
散々失敗し続けて、やっと一日の授業が終わった。

そんな日が続き、気づいた頃には金曜日になっていた。
しかし、今日はいつもと違った。
アゲハの変化に気づいていた担任の瑞穂に呼び出されたのだ。

「俺に関わるな！！」と、突き放したはずの沙慧はあれから毎日、笑顔で話しかけてきていた。
アゲハは何の反応も示さないでいたが、沙慧は、とても楽しそうに一日の出来事を話していた。
沙慧の楽しそうな感情と一緒に、アゲハを一生懸命元気づけさせようとする気持ちも伝わってきた。
そうして彼女の話を聞いていると瑞穂が入って来て、
「黒神君。放課後、職員室に来てくれる??」
と言ってきた。

「…わかりました。」

アゲハが返事を返すと、すぐに去って行った。

今は昼休み。

放課後までには、まだ授業が残っており、かなり時間がある。

たぶん最近の自分の様子について聞かれるだろうから授業中にでも適当な言い訳でも考えようと思った。

そんなことを考えている間も沙慧は絶えず話しかけていた。

「何かしたんですか??」

本当にわかってない純粋な顔で問うてくる。

最近のアゲハを見ていれば分かって当然なのに、そんな顔で言っているのだから何一つ悪気はないのだろう。

「お前には関係ないだろ。そろそろ昼休み終わるから、さっさと帰れ。」

「うん。ありがとう。戻るね。」

沙慧はニコニコしながら自分の席へと戻って行った。

アゲハは追い払うつもりで言ったのに、全然通用しなかった。逆に授業前の親切な行動に感じとられたみたいだ。

まるで子犬にでも懐かれたような感じだった。

くだらない授業を周りの目を気にしながら過ごしていると、あっという間に放課後になってしまった。

周りの目を気にするあまり、まったく対策を考えていない。

今からでも対策を考えようと頭を悩ませていると、ホームルームのため担任の瑞穂が入って来た。

「はい。ホームルーム始めるから、早く座りなさい。」

教室の後ろでふざけている男子にそう注意すると、さっそくホームルームを始めた。

明日の行事予定やら時間割変更やらの予告を終えると

「起立。礼。」

そう号令がかかった。

すると個人個人で机と椅子を後ろに寄せると、各自の清掃場所へと散って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2539x/

†Mind　Hunt†

2011年11月22日01時55分発行